



『Life is motion』



琉球大学整形外科 大嶺 啓

「Life is motion 生きていることは動いていることである」は古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉ですが、体を動かすことは人の生命、生活、人生そのものであり自己表現の基本と述べています。その体を動かす器官である運動器とは、四肢・体幹の骨格、関節、靭帯、筋や脊髄・神経であり、身体感覚を脳に伝えて、反射的あるいは意志に基づく身体運動を行う器官であります。運動器により営まれる運動は、脳や神経系を賦活し、循環系や代謝系の健康を保つために重要な役割を果たしています。その運動器を扱う診療科が整形外科です。また、乳児から高齢者までを対象にしていますので、整形外科がカバーする範囲は多岐にわたっています。現在、我が国の国民の多くが抱えている身体的愁訴は運動器由来で、厚生労働省国民生活基礎調査（平成16年）によると、男性は腰痛、肩こり、女性は肩こり、腰痛、関節痛が上位を占めております。通院患者数も男女とも高血圧症に続いて腰痛が2位で、平成13年度と比較して増加しています。さらに運動器に関する疾患や状態としては、骨粗鬆症、変形性関節症、関節リウマチ、スポーツ障害、四肢外傷などがあります。

世界では、新しい世紀の始まりと共に「運動器の10年」世界運動がスタートしました。この運動は、スウェーデンの Lund 大学・リドグレン教授が提唱したもので、2000年1月、スイス・ジュネーブの世界保健機構（WHO）本部において、その発足が宣言されました。国連やWHOもこの運動を強く支持しており、アナン国連事務総長は、「この運動は、世界中の多くの、筋骨格系の疾患や外傷に苦しむ人たちに恩恵を与えるのみならず、社会経済に及ぼす影響にも極めて大きいものがある」との声明を出しています。「運動器の10年」世界運動の目標は、1) 運動器障害の実態を世界各国がWHO

と協同して調査し、患者、その家族、職場、社会や経済に及ぼす負担を把握し、これを社会に知っていただく、2) 患者や市民に、自らの運動器の健康管理により積極的に参加していただく、3) 質の高い、経済効率のよい治療・予防法を広く実施する、4) より本質的な治療・予防法を開発するための基礎的研究を推進することです。このように、世界的に見ても運動器に関する関心はますます高くなってきております。

さて、現在の大学は平成16年4月からの独立行政法人化、スーパーローテーション制度などこれまでにない変革の時代になっています。琉球大学整形外科では大学と関連病院での後期研修システムを構築、整形外科専門医を目指す若き医師の受け入れを行っております。関連病院は県内の主要病院のほか、手術件数が3,000件を超える新潟中央病院、同じく2,000件を超える熊本整形外科病院、聖隷浜松病院などがあります。専門分野として、新潟県富永草野病院では、脊椎外科、聖隷浜松病院ではスポーツドクターとしてジュビロ磐田の帯同を経験できます。また、日本医師会、日本整形外科学会、日本体育協会のスポーツ専門医制度もあり、チームドクターや国体への帯同も行っています。現在、5名の医師が、専門研修に参加しています。また、前述したように、運動器関連の疾患は非常に多いので、初期研修の2年間に必須科として整形外科をローテーションすべきだと思います。

県内の整形外科医の現状を見ると、一段と高まるニーズに対して、まだまだマンパワーが足りない状態です。整形外科に興味のある若き医師の皆さん、我々と一緒に健康長寿県沖縄に貢献してみませんか。お問い合わせは aomine5@med.u-ryukyu.ac.jp まで、お気軽にご連絡下さい。



研修医の自己紹介

北部地区医師会病院 1年目研修医 中安 弘毅



初めまして。私は平成18年4月から北部地区医師会病院で医師としての第一歩を踏み出しました中安弘毅と申します。この若手コーナーとは本来ならば研修医1年目の私などの文が載る場ではなく、むしろ私のような若輩者が諸先輩方の文章を読み、今後の医師人生の参考にするという場なので大変心苦しくはありますが4月から約半年が経った今、私たち研修医がどのように過ごしてきて、今後どのようにするのかを書かせて頂きたいと思えます。

私が日々勉強している北部地区医師会病院には今年度から私ともう1人の研修医がいます。この2人が医師としての研修を始めたわけですが、まず4月初旬、2週間をかけて病院内のコミディカルな部署を見学しどのような仕事をしているか、医師とはどのように繋がっているのかを知りました。私は学生の頃はコミディカル部門をほとんど意識していませんでしたのでこの2週間は本当に初めて知ることが多く、医師としてではなく医療に携わる者として大変勉強になり、医師として歩み出したこの半年間でも早速役に立っていると思えます。

この2週間が終わりいよいよ医師としての人生が始まったわけですが、医師会病院もスーパーローテーションという3年前から始まった制度にのっとり、まずは内科ローテーションが始まりました。しかし、いざ始まったら医師という人たちは何をやっているのかわかりませんでした。そのような疑問のために5月いっぱいまでの1ヶ月半は2年間通しての指導医に金魚の糞のようにくっついて歩き、採血、ライン確保など医師としてのいろはから勉強しました。

6月からは私の病院にある呼吸器・消化器・内分泌・循環器の4つの内科系の科を1ヶ月ずつローテーションしていきました。それぞれの科をローテートしましたが、皆様お察しかもしれませんが、1ヶ月ずつというのは短すぎました。スーパーローテーションの制度で内科は6ヶ月となっており、4つの科を回ろうとすれば

必然的に1ヶ月ずつになるのはしょうがないのですが、各科の仕事にやっと慣れてきたと思ったら次へローテーションとなってしまっていたのでもう少し長ければと思っていました。しかし、逆に考えたら、さわりだけでもいろいろな科でいろいろな先生から教わることができるのは自分にとって大変すばらしいことで、まさに医局にいる先生全員から様々な角度から教わることができるのです。これは、私が卒業した大学で研修を行わずに市中病院を選んだ理由の一つです。そのような意味では1つの科に1ヶ月しかいませんが逆にプラスになっているとも感じます。

しかし、そうは言っても時間が短いのは事実ですからそれを少しでも補うという意味でも、当直などもやらせてもらっています。私1人で患者さんを見るということは自分はもちろん、その場にいる全員が恐い思いをするのでその日の当直の先生について頂いています。もう数ヶ月したらローテーションで救急科も回るので一応形だけでも1人で患者さんを見られるようにしたいと考えております。

4月から医師として仕事をさせてもらえるようになり、約半年が経ちました。まだまだ早すぎるかと思いますが、この半年間も振りかえるとあっという間に過ぎてしまったように感じます。この間にもいろいろな先生から教えを請い、いろいろな患者さんに会いました。これを読んで下さっている諸先生方のように医師として患者さんに関わっているということには到底なっていませんが、これからますます頑張っって皆様にご迷惑をお掛けするようなことだけはないように努力していこうと考えております。この北部地区医師会病院で私の医師人生がスタートし、充実した毎日を送れていることに感謝しつつ、私の考える理想の医師になることができるように今後も努力していきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。